

Q: 讚美歌 21 には最後に「アーメン」が付加されているものと、付加されていないものがありますが、どうしてですか。

A: ご質問の、アーメンですが、ヘブル語で、「そのとおり」、という意味ですので、もともとは頌栄についていたものであって、それが教會的でした。初代教會のクリスチャン達は、ユダヤの伝統を継続し、詩編を朗誦し、詩編の後に「頌栄」「アーメン」を付加して歌っていたと言われていました。

ですが、ユダヤ教との区別化などから「アーメン」をなくしたという事が起こってきました。ただ、賛美の歌詞に、「そのとおり」と応答するのが、「アーメン」ですので、本質を思うと、形式的につける、つけないではなく、賛美ごとに定められるのが本来と思います。私としては、すべての賛美歌、聖歌、は、背後に流された血や苦しみを経て、養われ培われ生まれた歌詞であるため、「アーメン」と応答できるものと感じますので、「アーメン」と心の中で応答しています。

なお、1997年に刊行された「讚美歌 21」(日本キリスト教団出版局)の「この歌集の使い方」の6番目の項目「アーメンについて」に、本件に関し、日本の讚美歌集の歴史的な流れや「讚美歌 21」における方針について、以下の記述がありますのでご紹介させていただきます。

讚美歌のアーメンの有無は、時代や個々の歌集によってまちまちです。日本では1931年版と1954年版「讚美歌」において、すべての歌にアーメンが付けられたことにより、習慣的にアーメンを歌うようになりました。しかし本来、アーメンは歌詞の一部ではなく、礼拝においてその賛美歌の歌われる位置や用途、歌詞の内容によって有無が決まるものです。必要に応じてお使いいただけるように、便宜的にはほとんどの曲にアーメンに付けました。